源昌寺通信　木漏れ日

第3号

発行元：浄土宗 源昌寺
令和５年１２月発行

千年の善行にも勝る　十夜法要

12月1日（金）～3日（日）まで３日間、3席で十夜法要を行いました。

今年のお十夜法要では、来年が開宗八百五十年ということもあり、総本山知恩院からの法灯リレーのランタンを如来前にお飾りし、法要を執り行いました。

布教師のお話の中で「つなげる」ということが大切である。と話されておりました。心を繋ぐ。思いを繋ぐ。現代社会の中で一番大切なものであって、今失われかけているもの。だからこそ、もう一度。足を運び、仏さまの教えを聴く。その先に、受け継がれた思いを知ることになるのだと。寒い中にお参り頂きまして本当に有難うございました。

お話を頂いた　布教師　日野上人

納骨堂の修復・欄干取替工事完了

境内（本堂横）に建立されている納骨堂は、平成１７年に発生した福岡西方沖地震の際に、軒下のコンクリートがダメージを受け、数か所は落下、数か所はひび割れが発生しておりましたが、修復と安全対策の施工が完了しました。

また、欄干については、鉄骨がサビで膨れ、コンクリートが剥がれるなど破損した状態のままでしたが、丈夫なアルミ製の欄干への取替工事も完了しました。これにより、参詣者の皆様が安全に参詣でき、外観がよくなったことで源昌寺の景観が随分とよくなりました。費用はすべて納骨堂管理費より支出しております。

源昌寺の未来を考える総代会

現在、11名の総代さんで総代会を構成し、源昌寺の護持会費の予算・決算、年中行事の運営など、寺門興隆には欠かせない役割を担って頂いております。

寺院を運営する上で決断や協議を必要とする場面が多々あります。有森総代会長を中心に議論を重ね、より良い源昌寺となるように尽力されております。

写真は令和5年10月に開催した総代会の様子です。この時は、十夜法要や施設管理、初念仏講の日程などを協議いたしました。総代様ありがとうございました。

住職コラム

令和六年は浄土宗開宗八百五十年の節目の年を迎える。本山や各寺院は記念事業として、全国で法灯リレー等を行い浄土宗の教えをさらに深める準備をしている。思い返せば二十数年前。まだ若いだの私は僧侶となるべくして、本山や大本山にて行われる養成道場に入行。それは同時に厳しい修行の始まりでもあった。果たしてこんな自分に満行の日が訪れるのだろうか。不安と恐怖が入り混じる中で、日々自分との戦いであった。お釈迦さまは、「仏教は法鏡である」とお説きになった。「法鏡」とは、ありのままの自分の姿を映し出す鏡ということ。自己の姿を知らずしては、真の幸せを得ることは難しいのである。仏教は諸行無常や煩悩など、人生の実相や人間の本当の姿について懇切丁寧に述べられている。では、具体的にどうすればいいの？その方法を教えて？となるが、本当の自分の姿を知らなければその方法すらまともに受け入れられないのがこの私たちである。自分を見つめ、自分の姿を知る。そのことが非常に大切なのである。八百五十年の時を越え、浄土宗の念仏者としてどう生きるか。その「生き方」を問われているということであろう。ただひたすらにお念仏に励む。その心の中にあるものは。京都を訪れた際に時間があれば必ず立ち寄る場所。法然上人の御廟。その場所に立てば、辛い修行僧の時に読んだ上人が書かれた御法語の一節が思い浮かぶ。「信じてもなお信ずべきは必得往生の文なり」深く信ずることが何よりも大事である。